だるまの歴史

●ルーツは中国の玩具

昔、中国が唐（六一八～九〇七）の時代、お酒を勧める道具の一つに酒胡子と呼ばれる玩具がありました。酒胡子とは、お尻のとがった木製の人形で、今でいうコマのようなものです。これを盤のなかでクルクルと回し、やがて倒れて静止したときに、その倒れた方向に座っているものが指名され、盃を受けるか、さもなければ隠し芸をするという酒席の遊びとして使われていました。

明（一三六八～一六四四）の時代になると、酒胡子に代わって張子で作られた不倒翁と呼ばれる玩具が登場しました。その名のとおり、転がしても倒れない翁を描いた人形です。倒れない翁は不老長生の術によりこのように老いてますます元気な姿を象徴し、酒席の客の健康を祝福する意味を持っていたといわれています。

●起き上がり小法師への変身

不倒翁が日本に伝えられたのは、室町時代（一三三八～一五七三）の後半といわれます。当時は、中国との交易が盛んで、不倒翁も珍しいみやげ物として伝えられました。日本では酒席で使うのではなく、転んでも起き上がるところから、外観を元気な子供の姿に変えて、起き上がり小法師という名で子供のおもちゃとして使われ、もてはやされました。小法師という呼び名は室町時代には小さな僧としてではなく、自分の子供のことをへり下って呼ぶのに使いました。老いても「倒れない」翁が、元気な「起き上がる」子供に変身したのです。

●起き上がりだるまの誕生

起き上がり小法師は、江戸時代（一六〇三～一八六七）中期になると今度は起き上がりだるまに変身していきます。

達磨とは梵語で「法」を意味し、禅宗の始祖であると伝えられる達磨大師のことをいいます。達磨は五世紀ごろ南インド香至国の第三王子として生まれ、インド仏教第二十七祖である般若多羅の弟子となり、印可をうけて菩提達磨となりました。中国に渡って嵩山の少林寺に入り、そこで九年間壁に面して座禅し、ついに奥義を悟り、弟子の慧可にそれを伝えたといわれます。平安時代に伝えられた禅宗は、その教えが難解なことから、なかなか一般民衆の信仰の対象とはなりませんでした。しかし、白隠禅師（一六八五～一七六八）によって民衆にやさしく禅の教えが説かれ、達磨大師の絵や話が次第に民衆に伝わっていきました。

そして、江戸時代・明和年間（一七六四～一七七二）の頃、江戸ではいろいろなものを似たものに「見立てる」ことが流行しました。江戸の文化の中で達磨大師は、起き上がり小法師に見立てられました。手も足も見せずに、いかめしい顔をして座禅する達磨が身体を揺さぶりながら起き上がるこっけいさから、起き上がりだるまが誕生したのです。

●縁起物として全国各地へ

江戸時代・嘉永年間（一八四八～一八五四）の頃には、疱瘡除けのまじないとして一般民衆に歓迎されました。張子のだるまは軽いので病気が軽く済み、寝てもすぐ起き上がるので、病気がすぐに直るなどの理由で人々の口から口へ伝わり、全国各地で作られるようになりました。直ぐ起き上がるという縁起のよさは、農家の五穀豊穣、商人の商売繁